

# 人間が人間であるのをやめるとき

——「例外状態」のフィールドワークにむけて (2) ——

鈴木鉄忠\*

## **When Human Beings Cease to Be Human Beings: A Preliminary Consideration of Fieldwork on “the State of Exception” (2)**

SUZUKI Tetsutada

This study aims is to understand 20<sup>th</sup>-century societies and human dystopia at their roots and to explore concrete ways out of them. The question is why and in what form did the concentration camps of totalitarian states transform human beings? To answer this question, we focus on testimonies and reflections that attempt to view the situation of human beings in the camps not within a humanist framework, but within a non - humanistic vocabulary. First, we identified a significant link between the camps and the perpetuation of a state of exception, as discussed by Giorgio Agamben. Next, we examined the reflections of Primo Levi, Hannah Arendt, and Giorgio Agamben. It was argued that the forms of human life in the camps were described as beings excluded from the human species, as numbers, “human animals”, “Pavlov’s dogs” and “Muslims”, therefore to speak, as indistinguishable from humans and non-human beings. Finally, drawing on the lessons of Auschwitz drawn by Agamben, we highlighted to the possibility of ceasing to destroy the “human thing” in the difficult activity of testifying by proxy to the ultimate form of human dystopia.

キーワード：強制収容所, 例外状態, 証言, 証人, 生き残り, 人間, 非-人間, 反理想 (ディストピア), ジョルジョ・アガンベン, プリーモ・レーヴィ, ハンナ・アーレント

---

\* 東洋大学国際学部教授

## 【目次】

1. はじめに
2. 収容所とは例外状態の永続的な物質化である
3. 収容所は人間を「〇一八」に改変する
4. 「人間動物」の生産が収容所を可能にする
5. 人間が人間であるのをやめるときの生の形式
6. 結びにかえて

## 1. はじめに

本稿は、以前の拙稿<sup>1)</sup>の問題意識を引き継ぎながら、20世紀の社会と人間の反理想（ディストピア）の根本理解を目指し、そして反理想からの具体的な脱出口を探る試みである。ここで論じる問いは、全体主義国家の強制収容所は、どのような目的の下に、人間をどのような姿に変えたのかである。極限状況における人間の非人間的な生の形式の解明である。なぜこの解明が必要かといえば、収容所に強制収容された人間の果ての姿——もはや新たなものが生成されえない心的状態——は、人類史上初めて判明した人間の反理想の姿だからである。そして人間の反理想を作り出すシステムは、20世紀で清算されず、現代社会でも潜在的または顕在化して再生産される。よって、後戻りしてはならない道を確認し、その隘路からの脱出口を探ることが必要であると思われる。

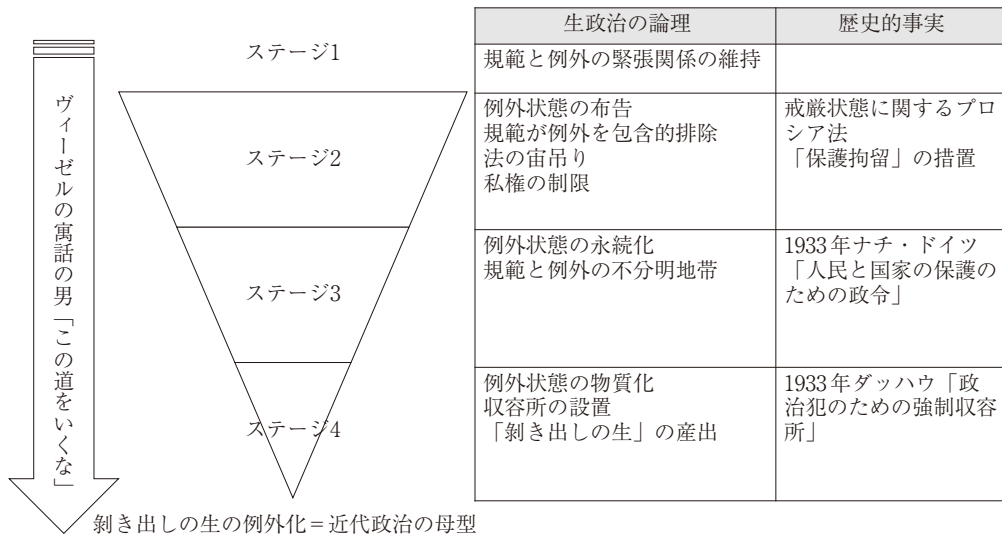
以上の問題意識を踏まえて、本稿の着眼点は、収容所で人間が置かれた状況をヒューマニズムの枠組みではなく、非人間的な語彙で捉えようとした証言や考察に据える。最初に収容所と近代政治の型の関連を確認した上で、プリーモ・レーヴィの証言と論稿、ハンナ・アーレントの議論、ジョルジョ・アガンベンの考察を取り上げる。これらの証言や考察では、収容所の人間は、番号、「人間動物」、「パブロフの犬」、「回教徒」といったように、人類という種から排除された存在として、いわば人間と非人間の区別がつかない存在として記述される。こうした事実認識を通じて、死にもっとも接近した生の形式とはどのようなものかの理解を試みる。最後に、人間の反理想の究極の形態の理解とその証言のなかに、「人間的なもの」を完全に破壊できない可能性を探る。

## 2. 収容所とは例外状態の永続的な物質化である

社会のなかで例外と規範は区別されるのが通常である。しかしながら、例外が規範になると、さらに例外状態が永続化し、収容所として物質化すること——これが近代政治の母型であ

1) 鈴木鉄忠「20世紀からの答えなき問いかけ—「例外状態」のフィールドワークにむけて」『中央大学社会科学研究所年報』第25号、2021年、79-96頁。

図1 ヴィーゼルの寓話と収容所に至る4つのステージ



ることを以前の拙稿で論じた。そしてこの傾向は終わっておらず、むしろ潜在的収容所の増殖傾向が現代社会にみられることも確認した。図解を再掲すれば、ステージ1から4への移行する力学が現在も機能しているということである（図1）。

この事態の要点は、次のような状況で想像できる。信号機の前に車が近づくとき、私たちは赤信号なら止まれ、青信号なら進めだと思っている。これが交通規則であり、規範である。ただし例外がある。サイレンが鳴り響いたときである。この非常事態では、通常交通規則と規範は宙づりにされる。サイレンを鳴らしたパトカーや救急車や消防車は、例外的に赤信号を進入することが許される。それ以外の車や人は、青信号でも動いてはならない。だが救急車が通り過ぎるか、サイレンが消えるか、火事や事件といった非常事態の事実がなくなれば、例外状態は解除される。そしてまた通常の規則と規範に戻るのである。

だが、サイレンが鳴り続いたままどうなるか。それが例外状態の永続化である。図1でいえば、ステージ2からステージ3への移行である。非常事態を布告し、サイレンを鳴らすことのできる主体は、通常の規則や規範を停止して、物事を決定する力を獲得するのである。このサイレンは、空襲警報、Jアラート、緊急速報にも置き換え可能である。もしステージ3の例外状態の永続化に反対する者を組織的に排除する仕組みが整えられる場合、ステージ4に入る。つまり例外状態の物質化する収容所の稼働に移行することになる。潜在的収容所出現の合図が、このサイレンやアラートなのである。

ではステージ4の収容所では、そこに閉じ込められた人間に何が起こるのか。はたして人間は人間のままでいられるのか。

### 3. 収容所は人間を「〇一八」に改変する

プリーモ・レーヴィは収容所で「〇一八」と呼ばれていた男について書き残している。

みなはもっぱら彼を、登録番号の下三けたを取って、〇一八（ヌル・アハツェーン）と呼んでいる。名前は人間にしか与えられないものだ。だからもはや人間ではないヌル・アハツェーンには名前はいない、とみなが了解しているかのようだ。彼自身も自分の名を忘れてしまったに違いない。確かにそんな風に振る舞っている。話をしたり、物を見つめたりする時、心は空っぽだ、という印象を受ける。もはや完全な抜け殻なのだ。糸で石に留められて、池の水辺で風に揺れている、昆虫の抜け殻と同じだ<sup>2)</sup>。

「〇一八」は「もはや人間ではない」と周囲からみなされていた。名前を呼び合う者は誰もおらず、彼の心は空っぽであり、完全な抜け殻（involucro）になった。だが、本当の抜け殻のように体がもはや動かないわけではない。彼は周囲と比べれば若く、体が弱いわけではなかった。

だがみな彼と働くのをいやがる。あらゆることにひどく無関心で、重労働や殴打を避けたり、食物を探すことにまったく関心がないからだ。彼は命令されたら、すべてを実行する。……彼は完全に消耗する前に働くのをやめるといふ、荷車引きの馬さえ持っている初歩的なずるさをもちあわせていない。彼は力の許す限り運び、押し、引く。そして何も言わずに、その濁った悲しげな目を地面から上げもせず、不意に崩れ落ちる。私は最後の最後までそりを引いて死んだ、ジャック・ロンドンのそり引き犬のことを思い出す<sup>3)</sup>。

体は動いているが、「無関心」であり、「命令されたら、すべてを実行」する。そして重労働に体が耐えられなくなったとき、「不意に崩れ落ちる」。

レーヴィは「これが人間か、考えてほしい（considerate se questo è un uomo）」で読者に問う。「〇一八」をどう表現すればよいのか。下三けたの番号、「抜け殻」、「そり引き犬」のように、人間とは呼ばれなくなっている存在を名付けることはできるのか。

「〇一八」のような者は収容所で「回教徒（der Muselmann）」と蔑まれて呼ばれた<sup>4)</sup>。レー

---

2) Levi, Primo, *Se questo è un uomo*, Torino: Einaudi, 2005 [1958]. = プリーモ・レーヴィ, 竹山博英訳『これが人間か—アウシュヴィッツは終わらない 改訂完全版』朝日新聞出版, 2017年, 49頁.

3) レーヴィ, 2017年, 49頁.

4) カギ括弧をつけているのは、実際のムスリムとは無関係であることを強調するためである。そうでもなくともこの俗称はムスリムに対して差別的な意味合いがある。だが収容所で実際に用いられたもの

ヴィによれば、この言葉はあらゆる収容所で共通で使用されており、「取り返しがつかないほどに消耗し、疲れ切った、死を待つばかりの囚人に使われた」のだが、その語源ははっきりしないという<sup>5)</sup>。アガンベンはこの語の起源を探り、回教徒を「無条件に神の意思に服従する者の意」に解する中世以来のヨーロッパ文化の文脈や、「たえず上体を倒しては起こすことによって祈るアラブ人に特有の動作」の説を紹介しているが、意見は一致していないという。ただし象徴的な意味は明白であり、「ユダヤ人は——一種の残酷な自嘲とともに——自分たちがアウシュヴィッツではユダヤ人として死んでいくのではないこと」、つまりユダヤ人が「回教徒」に変わるなど、通常では決してありえない事態、あつてはならない出来事が起こるのが収容所である<sup>6)</sup>。

〇一八のような男がつかまざりたとしても、手をのべるものはいない。逆にわきに突き倒すものはいるかもしれない。というのはたかが「回教徒」がまた一人、毎日の作業に体を引きずってこれなくなっても、興味を持つものなどいないからだ<sup>7)</sup>。

収容所には厳格な序列がある。その最底辺にいるのが「回教徒」だった。

打ち負かされるのは一番簡単なことだ。与えられる命令をすべて実行し、配給だけ食べ、収容所の規則、労働規律を守るだけでいい。経験の示すところでは、こうすると、よい場合でも三か月以上は持たない。ガス室行きの回教徒はみな同じ歴史を持っている。いや、もっと正確に言えば、歴史がないのだ。川が海に注ぐように、彼らは坂を下まで自然にころげ落ちる。収容所に入って来ると、生まれつき無能なためか、運が悪かったか、あるいは何かつまらない事故のためか、彼らは適応できる前に打ち負かされてしまう。彼らは即座に叩きのめされてしまうので、ドイツ語を学んだり、規則や禁制の地獄のようなもつれあいに糸口を見つけたりすることもできないうちに、すでに体はだめになり、何をもってしても選別や衰弱死から救い出せなくなっている。彼らの生は短いが、その数は限りない<sup>8)</sup>。

---

であり、この用語を通じて極限状況の人間と非-人間のあいだにある存在形態としてアガンベンが考察を深めていることから、本稿ではこの語彙をカギ括弧つきで用いる。

5) Levi, Primo, *I sommersi e i salvati*, Torino: Einaudi, 2007 [1986]. = プリーモ・レーヴィ、竹山博英訳『溺れるものと救われるもの』朝日文庫、2019年、126頁。

6) Agamben, Giorgio, *Quel che resta di Auschwitz: l'archivio e il testimone*, Torino: Bollati Boringhieri, 2020 [1998]. = ジョルジョ・アガンベン、上村忠男／廣石正和訳『アウシュヴィッツの残りのもの—アルシーヴと証人』月曜社、2018年、57頁。

7) レーヴィ、2017年、111頁。

8) レーヴィ、2017年、113頁。

そして「回教徒」はガス室送りになるか否かの「選別」の対象となっていた。

彼らこそが溺れるもの、回教徒であり、収容所の中核だ。名もない、非人間のかたまりで、次々に更新されるが、中身はいつも同じで、ただ黙々と行進し、働く。心の中の聖なる閃きはもう消えていて、本当に苦しむには心がからっぽすぎる。彼らを生者と呼ぶのはためらわれる。彼らの死を死と呼ぶのもためらわれる。死を理解するにはあまりにも疲れきっていて、死を目の前にしても恐れることがないからだ。

「回教徒」は生きていても、生者と呼ぶことがためらわれる。そして死を迎えたとしても、人間の死と呼ぶことがためらわれる。つまり人間の生の領域にも死の領域にも分類できないほど非人間的な領域の底に沈んだ者として描かれる。

顔のない彼らが私の記憶に満ちあふれている。もし現代の悪をすべて一つのイメージに押し込めるとしたなら、私はなじみ深いこの姿を選ぶだろう。頭を垂れ、肩をすぼめ、顔にも目にも思考の影さえ読み取れない、やせこけた男<sup>9)</sup>。

ここで留意したいのは次の3つである。第1に、収容所における「回教徒」の生と死は、もはや人間らしいとは呼べない姿にまで変容したということである。第2に、それでもなお、生物学的には生きているという事実である。第3に、まさにその事実が「収容所の中核」であるという点だ。レーヴィが「il nerbo del campo (収容所の中核)」と記したイタリア語 nerbo は、二重らせん形状の革のむちを意味し、転じて中核、最強部、活力の含意をもつ。解剖学では神経や腱 (nervo) の意味である。通常の社会では「やせこけた男」が組織の中核を担うことはあり得ない。しかしながら、例外が永続的な規則となった収容所では、「回教徒」の姿こそがシステムを存続させる神経系なのである。いわば人間が人間のままでいられなくなればなるほど、このシステムは強化される。

#### 4. 「人間動物」の生産が収容所を可能にする

収容所における生と死がもはや人間的な生と死とは呼べず、そこにこそ収容所システムの存立基盤があるのではないか。この洞察は、アーレントの『全体主義の起原』からも読み取ることができる。「回教徒」という語を用いていないが、『全体主義の起原 3 全体主義』「第3章 全体的支配」「3 強制収容所」において、レーヴィのいう「〇一八」「回教徒」と同じ特徴を

---

9) レーヴィ、2017年、113頁。

もった姿に言及している<sup>10)</sup>。

アーレントによれば、人間を人間ならざる者に変容させる過程で、3つの剥奪が行われた。第1に、法的人格の剥奪である。「人間からその権利を奪うこと、人間の裡にある法的人格を殺すこと、これは全体的な支配がおこなわれるための前提条件であり、自由な同意ということさえもこの支配にとっては邪魔になる<sup>11)</sup>」。基本的人権を含む様々な権利の土台にあるもの、つまり「諸権利を持つ権利」の剥奪である。第2に、道徳的人格の剥奪である。収容所が奪うのは人間らしい生だけではなく、死さえも取り上げる。「追憶されることへの権利を殺された敵にも認めて来た」西欧文化の人間主義は、「だからこそすべては保たれ、跡形なく消え去るということはありませんでした」。しかし、「強制収容所は死そのものすら無名なものとするので（中略）死というものがいかなる場合にももつことのできた意味を奪った<sup>12)</sup>」。

最後に、人間の人格の個性性、唯一性の破壊である。人間の個性性、唯一性は、「自然と意志と運命の三者が相寄って形造られ、その無限の多様性において一切の人間関係のきわめて自明な前提をなして、そのためわれわれは瓜二つの双児を見るだけである戸惑いをおぼえるほど」であるがゆえに、「この個性性、唯一性の破壊は、法的・政治的人格のおぼえる怒りや道徳的人格が味わう絶望よりもはるかに深い戦慄をわれわれに感じさせる<sup>13)</sup>」。これらの剥奪の末に、人間が人間であるのをやめる地点が出現する。

結局のところすべての人間はひとしく動物であると——いかにももっともなことだが——主張する、強制収容所体験を普遍化したニヒリズムはここにはじまるのである。まことに強制収容所の経験は、人間を人間の顔をした動物の一種に変えることは事実可能であり、人間の〈自然〉（本性）が〈人間的〉であるのは、きわめて非自然的なもの、すなわち人間になることが人間に許されている場合のみであることを明示している<sup>14)</sup>。

ここでアーレントが人間を表現する用語を使用していないことに注意したい。人間になることが許されない収容所において、人間は「人間の顔をした動物の一種」に変えられる。レーヴィが「〇一八」「回教徒」と述べた姿に重なる。アーレントは、個性性、唯一性に加えて、もう1つの要素——自発性——の破壊にも言及する。収容所では被収容者による暴動や抗議がほとんど起こらなかった。その理由としてこのように述べる。

10) ハンナ・アーレント、大久保和郎／大島かおり訳『全体主義の起原 3 全体主義』みすず書房、1974年、242-3頁および注(106)。

11) アーレント、1974年、252頁。

12) アーレント、1974年、254頁。

13) アーレント、1974年、257-8頁。

14) アーレント、1974年、258頁。



というのは、個性性の破壊ということは、自発性の——つまり、環境や事件に対する反応では説明され得ないある新しいものをみずから進んで創始する能力の——抹殺にほかならないからである。その後に残るのは、生身の人間の顔を与えられているが故にかえって無気味な、例外なしに死にいたるまで唯々諾々と反応を——反応のみを——つづけるパブロフの犬と同様にふるまうあの操り人形なのだ。これこそシステムの最大の勝利である<sup>15)</sup>。

人間の顔をした「パブロフの犬」「操り人形」は、もはや人間と非-人間の区別がつかない存在として現れる。次の引用の「パブロフの犬」はレーヴィのいう「〇一八」「回教徒」に読み替え可能である。

パブロフの犬は最も基本的な反応に還元された人間動物の見本であって、いつでも殺して、同じく行動をする他の反応の束と取り替えることができる。このパブロフの犬こそ全体主義国家の〈市民〉のモデルなのだが、収容所の外ではこのモデルは常に不完全な形でしか作り出せないのだ<sup>16)</sup>。

収容所の外、つまり規則と例外が区別される市民社会では作りだすことが不可能なはずの「人間動物の見本」が、収容所内部において完全形で作りだすことが可能になる。これこそが収容所の存在意義であり、それによって全体主義体制は支えられる。レーヴィが「〇一八」「回教徒」を「収容所の中核」と呼んだように、「パブロフの犬」の生産こそが「システムの最大の勝利」だとアーレントは捉えた。想像を絶することが当然のように行われる収容所は、一見すると非合理にみえる。ところが、「実は収容所は他のすべての制度よりも効果的に体制側の権力維持に役立つ<sup>17)</sup>」とアーレントは述べる。レーヴィでいえば〈回教徒——収容所〉の必然的なつながりがあり、アーレントの議論でいえば、〈パブロフの犬に還元された人間動物——収容所——全体主義国家〉の三者の垂直統合の連関がある。

## 5. 人間が人間であることをやめるときの生の形式

死の収容所であるよりもまえに、アウシュヴィッツは、生と死を越えたところでユダヤ人が回教徒に変容し、人間が非-人間に変容するという、これまで考えられたこともない実験場である。回教徒が何者であるのか、あるいは何物であるのかをまず理解するまでは、かれといっしょにゴルゴンを見つめることを習得するまでは、わたしたちはアウシュ

15) アーレント, 1974年, 258頁。

16) アーレント, 1974年, 260頁。

17) アーレント, 1974年, 260頁。



ヴィッツがなんであるのかを理解することはないだろう<sup>18)</sup>。

アガンベンは『ホモ・サケル』のなかで、強制収容所を「最も絶対的な非人間的な条件が実現した場」とした。そして続編の『アウシュヴィッツの残りのもの』では、強制収容所の極限状況において、人間が人間であることをやめる最終地点が存在したことを直視する。生物学的には生きているのに、もはや人間として生きているとは呼ぶことがためらわれる状態まで沈んだ者たち——収容所の「回教徒」——と近代政治のパラダイム——生政治——との関係性を明らかにしようと試みる。収容所における心理状態や全制施設の被収容者の変容過程についてはすでに証言や研究がある。また近代政治と生政治に関する議論も存在する。前者のミクロな次元と後者のマクロな次元の関係性を発見したのがアガンベンの慧眼だと思われる。つまり、〈「回教徒」(=剥き出しの生)——収容所——生政治(=近代政治の母型)〉の論理連関を精緻な分析と考察で明らかにしていったのである。ここでは〈「回教徒」——収容所〉の関連に限定して検討する。

アガンベンは、アウシュヴィッツの被収容者が生の否定(収容所内部)から死の収容所(ガス室)へすぐに向かうわけではないこと、いわば収容所とガス室のあいだで行われた前代未聞の実験に注意を向ける。なぜならそれを理解できなければ、「わたしたちはアウシュヴィッツがなんであるのかを理解することはない」と考えるからである。その渦中にあるのが「回教徒」である。

様々な証言を挙げながら、「回教徒」はもはや人間として語るができない事実をアガンベンは直視する。「かれは人間と非-人間のあいだの閾の存在を指し示して」おり、「見かけは人間のままで、人間が人間であることをやめる地点が存在」し、「その地点が回教徒であり、収容所は、かれにとってうってつけの場所である」と論じる。そして次のような問いを提起する。

人間にとって、非-人間になるとは、なにを意味するのだろうか。人間の生物学的な人間性から区別し分離することのできる人間性は存在するのだろうか<sup>19)</sup>。

アガンベンは同じ問いを別の表現で問い直す。

「極限状況」において賭けられているのは、「人間のままでいるか、そうでないか」、回教徒になるか、そうでないか、である<sup>20)</sup>。

---

18) アガンベン, 2018年, 67頁.

19) アガンベン, 2018年, 70-71頁.

20) アガンベン, 2018年, 71頁.

人間のままでいる者はそれを保持しているが、回教徒になる者が失うそれとは一体何か。回教徒が手放してしまうそれとは何か。一般的に想定されるのは、道徳、尊厳、自尊心、理性、意志、倫理、自己意識といった回答だろう。実際に、ナチス政権下の強制収容所からの生還者であるベテルハイムは、人間と「回教徒」の違いを、生き残りへの強烈な決意、活動的な思考、希望に見出す<sup>21)</sup>。また極限状況における人間存在に関する著名な研究においても、道徳の保持(または喪失)が重要な分岐点と考えられてきた<sup>22)</sup>。だがアガンベンは、人間と非-人間の決定的な分岐点はもはや道徳や尊厳の範疇の外部にあると考える。どういうことだろうか。

「人間のままでいる」とは、なにを意味するのだろうか。その答えは容易ではないこと、それどころか、この問いそのものについてまだ十分に考察されていないことが、「これが人間かどうか考えてみてほしい」という、生き残り証人の忠告のうちに暗に示されている<sup>23)</sup>。

ここで「生き残り証人の忠告」とは、レーヴィの忠告を指している。『これが人間か(Se questo è un uomo)』の書題は、条件節を導く問い(もしこれが人間ならば)のようにみえる。だが、本書冒頭の詩の一節にあたる「これが人間か、考えてほしい(considerete se questo è un uomo)」が、命令形であることにアガンベンは注意を促す。つまり従属節を導き、ためらいや疑念を含んだ「これが(本当に)人間かどうか、あなた方で考えてみなさい」という意味である。そこでアガンベンは、「人間」という語の意味を問いの意味そのものがすっかり変わるところまで後退させる<sup>24)</sup>ことで、レーヴィの忠告に回答しようとする。どういうことか。つまり生物学的なカテゴリーの最果てに限りなく近い地点で人間の生の形式を考える、ということである。ここでアガンベンは、レーヴィが『これが人間か』を発表した1947年に、強制収容所の体験を表したロベール・アンテルムの作品を補助線にする。

アンテルムにとって、収容所において問題となっていたのは、人類への帰属という「ほとんど生物学的な」要請、種への帰属という究極の感情であった。「人間としての資格を否定することは、人類(espèce humaine)への帰属というほとんど生物学的な要請に挑むことである<sup>25)</sup>」

---

21) ベテルハイム、ブルーノ、高尾利数訳『生き残ること』法政大学出版会、1992年、399頁、411頁。

22) バウマン、ジークムント、森田典正訳『近代とホロコースト』大月書店、2006年。トドロフ、ツヴェタン、宇京頼三訳『極限に面して—強制収容所考』法政大学出版会、1992年

23) アガンベン、2018年、74頁。

24) アガンベン、2018年、75頁。

25) アガンベン、2018年、75頁。

「種への帰属という究極の感情」には、ヒューマニズムに関連する要素は一切みあたらないことに注意したい。ここでは「道徳的ないし政治的な連帯の表明ではな」く、「厳密な意味での生物学的な帰属」が問題となっている。収容所において自らの存在は人類という種に帰属しているのか否か、まさに種への帰属が賭けられている<sup>26)</sup>。「自分が人間として、種の一員として否認されていると感じた」ということ、そのことを「もっとも生々しく恒常的に感じ、経験していたこと」、さらに「まさにそれこそが、相手が望んでいたことなのである」というアンテルムの証言に対して、アガンベンは「したがって、「人間ではなく豚」という収容所のおきては、文字どおりに受け取らなければならない」と言い切る<sup>27)</sup>。ここでの「豚」は、「種への帰属という究極の感情」を失った「〇一八」「人間動物」「パブロフの犬」と同じ意味であろう<sup>28)</sup>。

この地点からレーヴィの『これが人間か』を理解するとどうなるか。

これが人間か、考えてほしい Considerate se questo è un uomo  
 泥にまみれて働き Che lavora nel fango  
 平安を知らず Che non conosce pace  
 パンのかけらを争い Che lotta per mezzo pane  
 他人がうなずくだけで死に追いやられるものが。 Che muore per un sí o per un no.  
 これが女か、考えてほしい Considerate se questa è una donna,  
 髪は刈られ、名はなく Senza capelli e senza nome  
 思い出す力も失せ Senza più forza di ricordare  
 目は虚ろ、体の芯は Vuoti gli occhi e freddo il grembo  
 冬の蛙のように冷えきっているものが<sup>29)</sup>。 Come una rana d'inverno

ここに登場する「人間」「女」は、まだ生きている。だが、倫理、道徳、尊厳、自尊心、誇りといった、ヒューマニズム的なものは一切存在しない。それほど過酷な環境で、人が生きていた。そして「種への帰属という究極の感情」を失うか否かの瀬戸際に立たされている。「レーヴィにとってはむしろ回教徒は、道徳そのもの、人間性そのものが問いに付される実験場であり、「そこでは、尊厳や自尊心のようなカテゴリーだけでなく、倫理の境界という観念そのもの

26) アンテルム、ロベール、宇京頼三訳『人類』未来社、1993年、8頁。

27) アガンベン、2018年、75-76頁。

28) 例えば以下のエピソードを参照のこと。「アウシュヴィッツでは「食べる」は fressen（食らう）と言ったが、それは由緒正しいドイツ語では、動物だけにしか使われない動詞である」（レーヴィ、2019年、127頁）。

29) レーヴィ、2017年、3-4頁。Levi, 2005, p. 7.

が意味を失ってしまう」とアガンベンは言う<sup>30)</sup>。もはや善悪の区別それ自体が意味をなさない環境でもなお、人が生きていること、「零度の極みにあってもなお生が営まれること——このことが、生き残った者たちが収容所から人間の国にもち帰る残酷な知らせである。そして、この新しい知識が、いまや、あらゆる道徳とあらゆる尊厳を判断し測定するための試金石になる」とアガンベンは考えた<sup>31)</sup>。

さらに考察を深めたアガンベンは、アウシュヴィッツの教訓を次のように要約する。

人間は人間のあとも生き残ることのできる者である（傍点原文——*l'uomo è colui che può sopravvivere all'uomo*）<sup>32)</sup>

どういうことだろうか。アガンベンはこのテーゼの「人間」に複数の意味を込めている。通常私たちが想定する人間を「人間0」としよう。少なくともアガンベンは4つの人間のあり方に言及する。

第1に、「人間よりも長く生き残る非人間的な能力（*l'inumana capacità di sopravvivere all'uomo*）」を意味する。ここでは「回教徒」を人間1としよう。すると先のテーゼは、「人間1（＝「回教徒」）は人間0のあとも生き残ることのできる者である」と言い換えることができる。第2に、レーヴィのように生き残った証人（ここでは人間2とする）のことを指す。「回教徒よりも、非-人間よりも長く生き残る、という人間の能力（*la capacità dell'uomo di sopravvivere al musulmano, al non-uomo*）」を示す。すなわち、「人間2（＝生き残った証人）は、人間1（＝「回教徒」）のあとも生き残ることのできる者である」と言い換えられる。最後に、アガンベンは次のレーヴィの言明、すなわち「かれら、「回教徒」、沈んでしまった者たちこそが、完全な証人である」を取り上げる。そして第1と2の意味に結びつけて、第3に、「人間とは非-人間であり、人間性が完全に破壊された者こそは真に人間的である（*l'uomo è il non-uomo, veramente uomo è colui la cui umanità è stata integralmente distrutta*）」と定式化する。ここでは「人間3とは人間1（＝非-人間、すなわち「回教徒」）であり、人間性が完全に破壊された者こそは真に人間的である」と論理的には言い換え可能である。上記では、人間0から人間3までの4種の人間が表現されている。そして人間1と人間3は「回教徒」のことを指しているのである。

では、「人間とは非-人間である」「回教徒こそが完全な証人である」とは一体どういうことだろうか。ここにはアガンベンが「アウシュヴィッツの独特の倫理的アポリア」と呼んだ事情

30) アガンベン、2018年、81-82頁。

31) アガンベン、2018年、90-91頁。

32) アガンベン、2018年、108頁、182頁。Agamben, 1998, p. 76, p. 124.

が根深く関係している。というのも、生き残った者たちは、人間として最良の者だったから生き残ったのでもなければ、回教徒より人間的に優れていたから生き延びたわけではまったくないと、少なくともレーヴィとアガンベンは考えるからである<sup>33)</sup>。レーヴィは、自らを含めた生き残り証人の不完全さを強く主張する。「むしろ最悪のもの、エゴイスト、乱暴者、厚顔無恥なもの、「灰色の領域」の協力者、スパイが生き延びていた。……つまり最も適合したものたちが生き残った。最良の者たちはみんな死んでしまった<sup>34)</sup>」。よって、「真の証人とは私たち生き残りではない」と繰り返す。

私たちは背信や能力や幸運によって、底にまで落ちなかったものたちである。底まで落ちたものは、メドゥーサの顔を見たものは、語ろうにも戻ってこられなかったか、戻って来ても口を閉ざしていた。だが彼らが「回教徒」、溺れたものたち、完全な証人であった。彼らの証言が総合的な意味を持つはずであった。彼らこそが規準であり、私たちは例外であった<sup>35)</sup>。

この地点で「人間性が完全に破壊された者こそは真に人間的である」が何を意味するのかが判明してくる。生き残った証人（≡レーヴィ）は、回教徒のあとにも生き残ることができる者だけでも、「完全な証人」ではなく、「総合的な意味を持つはずであった」証言を行うことはできない。なぜなら「底にまで落ちなかったものたち」だからである。だが同時に、「回教徒」も総合的な意味を持つ証言を行うことはできない。なぜならば、「死人に口なし」ゆえに語ることもはやできないか、語る意志や能力をもたないからである。

最終段階まで行われた破壊、その完成された仕事についてはだれも語っていない。それは死者が帰って来て語らないのと同じである。溺れたものたちは、もし紙とペンを持っていたとしても、何も書かなかっただろう。なぜなら彼らの死は、肉体的な死よりも前に始まっていたからだ。彼らは死ぬ何週間も、何か月も前に、観察し、記憶し、比べて計り、表現する能力を失っていた。だから私たちが彼らの代わりに、代理として話すのだ<sup>36)</sup>。

アウシュヴィッツの教訓のもっとも逆説的な第3の意味とアガンベンが指摘したこと、すなわち「人間とは非-人間である」が何を意味するのかも、この地点で判明する。ここでの非-

---

33) アガンベン、2018年、78頁。

34) レーヴィ、2019年、104-105頁。

35) レーヴィ、2019年、106-107頁。

36) レーヴィ、2019年、107頁。

人間とは、「最終段階まで行われた破壊」を経験した者、「回教徒」である。「回教徒」は、「死ぬ何週間も、何か月も前に、観察し、記憶し、比べて計り、表現する能力を失っていた」。それゆえに非-人間といわざるをえない。しかしながら、最終段階まで行われた破壊を経験した者であるがゆえに、人間とは何であるのかを最後まで見届けた唯一の存在である。彼らこそ生き残った証人たちが見聞きしなかった人間的なものの最果てまで経験した者だった。その意味で「真に人間的 (veramente uomo)」である。

それでは、完全な証人である「回教徒」は語るができないため、もはやなすすべがないのだろうか。生き残った証人は、不完全な証言しか残せないゆえに、その証言は意味をなさないのだろうか。否である。レーヴィは、生き残った証人、救われた者、「私たちが彼らの代わりに、代理として話すのだ (parliamo noi in loro vece, per delega)」と語る。なぜそうするのか。レーヴィは明確な動機や道徳的義務があるとははっきりいえないとしつつ、また精神分析によるもっともらしい説明を拒否して、「確かなのは私たちがそれを強固な、永続的な衝動にかられてしていることだ」と述べる。ここにこそ完全な証人ではなく、「残りのものとしての証人」が存在すること、当人の証言が存在しうること、アガンベンは注意を促す<sup>37)</sup>。どういうことだろうか。「回教徒」は完全な証人だが、証言を残すことはできない。また生き残った者は証言を残すことができるが、底まで落ちなかったがゆえに不完全な証人である。しかしながら、もし生き残った証人が「回教徒」の代理として、沈んだものたちの代わりとして証言するならば、どうなるか。そのとき代理で証言する者は、人間と非-人間のあいだに立つことになる。

アウシュヴィッツの残りの者——証人たち——は、死者でもなければ、生き残った者でもなく、沈んでしまった者でもなければ、救いあげられた者でもなく、かれらの間にあって残っているものである<sup>38)</sup>。

またこのようにアガンベンは述べる。

もし生き残った者が証言するのがガス室やアウシュヴィッツについてではなく、回教徒のためであるなら、もしかれがあくまでも話すことの不可能性から出発してのみ話すなら、

---

37) アガンベンによれば、証人を意味する言葉がラテン語には2つあるという。1つは *testis* であり、「二人のあいだで争われる裁判もしくは訴訟において第三者 (*terstis*) の立場に立つ者」を意味する。もう1つは *superstes* であり、「なにかを体験したり、なんらかのできごとを最後まで生きぬいた生存者であるため、それについて証言できる者」を意味する。レーヴィは後者の意味での証人である。アガンベン、2018年、16頁。

38) アガンベン、2018年、221頁。また同書、182頁も参照。

そのときにはかれの証言は否定され得ない。アウシュヴィッツという、証言することのできないものは、絶対的にして反論の余地なく立証されるのである<sup>39)</sup>。

アガンベンは、最終段階まで行われた破壊を経験した「回教徒」から、証言の存在を通じて形勢を逆転させようとする。海底で光を放つ深海魚のように、「回教徒」のように完全な証人ではないと自覚しつつ、救われた者の恥ずかしさに苛まれてもなお、沈んでしまったものの代わりに語ることに、語ることの不可能性を承知の上で、それでもなお代理として証言せずにはいられない。そのことに積極的な意味を見出す。むしろ証言も安全な場ではなく、人間と非-人間のあいだにおいてのみ成立する不安定な場である。だがこの場合こそ、「人間的なものを完全に破壊するのは不可能であること<sup>40)</sup>」の証左である。

## 6. 結びにかえて

本稿の議論の要点をまとめる。20世紀の社会と人間の反理想を解明するために、収容所における人間の変容過程に着目した。ここでは道徳やヒューマンイズムの枠組みではない地点からこの極限状況を解明しようとしたレーヴィ、アーレント、アガンベンの証言と考察を手がかりとした。アウシュヴィッツでは、人間が人間であるのをやめる生の形式——番号、「人間動物」、「パブロフの犬」——にまで変容することを論じた。そしてアガンベンが定式化したアウシュヴィッツの教訓——人間は人間のあとも生き残ることができる者である——を掘り下げた。ここから導かれるいくつかの重要なテーゼをまとめると以下である。

1. 「回教徒」は、人間のあとも生き残ることができる者である。この場合の人間とは、尊厳や道徳といった枠組みで通常想定される人間である。
2. 生き残った証人は、「回教徒」のあとも生き残ることのできる者である。
3. 「回教徒」こそが、完全な証人である。なぜならば、人間性の破壊を最終段階まで経験した者は、「回教徒」を除いて他に存在しないからである。
4. 人間性を完全に破壊された者こそが真に人間的である。なぜならば、最終段階まで行われた破壊を経験した「回教徒」こそ、人間の何たるかを最後まで見届けた者だからである。
5. 生き残った証人 (testis ではなく superstes) は、最良の生き残りでもなければ「回教徒」でもなく、人間と非-人間のあいだにあって残っているものである。
6. 生き残った者が「回教徒」の代わりに証言するならば、証言の不可能性から出発してのみ話すならば、そのとき当人の証言は否定されえない。なぜならば、完全な証人であり、真に人間的な者である「回教徒」の代理として、人間と非-人間のあいだにある者として発

39) アガンベン、2018年、222頁。

40) アガンベン、2018年、182頁。



せられる証言には、何かしらの人間的なものが残るからである。

最後の6のテーゼの証言には、収容所——「回教徒」の強固な連結に、揺らぎをもたらす可能性があるのでないだろうか。

最後に今後の課題を指摘したい。本稿では〈収容所——「回教徒」〉の関連を論じたが、アガンベンは〈収容所——「回教徒」——生政治〉までつなげて議論している<sup>41)</sup>。ここに人間——制度——システムといった、ミクロ、メゾ、マクロの垂直統合が現れる。よって、生政治との関連を論じることが必要である。また「種への帰属という究極の感情」は、尊厳や自尊心や理性といったヒューマニズムの枠組みとは異なる帰属のあり方である。人間が人間でなくなるか否かの最後の帰属意識に係る論点も掘り下げた考察が必要である<sup>42)</sup>。

---

41) 「収容所は、死と大量殺戮の場であるだけでなく、なによりも、回教徒を生産する場、生物学的な連続体のうちで切り離されうる究極の生政治的実態を生産する場である。その向こうにはガス室しかない」アガンベン、2018年、112-3頁。

42) 詩人の長田弘は、アウシュヴィッツを訪れたときに、フランクルの一節を想起した。「フランクル『夜と霧』に記された、アウシュヴィッツ—ビルケナウ収容所での、ある夕べのこと。いましも日が没してゆく西の空の光景を凝視しながら、誰かが誰かに、ふっと語りかけるように呟く。『世界はどうしてこんなにうつくしいんだ!』二十世紀の百年の時代に遺された、それはきわみなく痛切なことばの一つだったと思う。」長田弘『長田弘 全詩集』みすず書房、2015年、584頁。

この一節はフランクルの『夜と霧』の「壕のなかの瞑想」に登場する。「とうてい信じられない光景だろうが、わたしたちは、アウシュヴィッツからバイエルン地方にある収容所に向かう護送車の鉄格子の間隙から、頂が今まさに夕焼けの茜色に照り映えているザルツブルクの山並みを見上げて、顔を輝かせ、うっとりとしていた。わたしたちは、現実には生に終止符を打たれた人間だったのに——あるいはだからこそ——何年ものあいだ目にできなかった美しい自然に魅了されたのだ」をはじめとして、いくつかの光景を書き残している。ヴィクトール・E・フランクル、池田香代子訳『夜と霧 新版』みすず書房、2002年、64-66頁。

人間の世界から放逐され、人類への帰属すら根底から揺らぐ非人間的な限界状況の下で、日没の光景を眺めながら「きわみなく痛切なことばの一つ」を発した人間がいた。アンセルムが「種への帰属という究極の感情」と述べ、「生物種として人類に帰属しているという「究極の」感情とは、どのようなのだろうか。そして、この感情のようなものは存在するのだろうか」というアガンベンの問いに対して、「世界はどうしてこんなにうつくしいんだ!」は1つの回答の方向性を示していると思われる。なお、人間が社会システムだけでなく、身体を通じてエコシステムにも同時に帰属する事実を社会理論に組み込んだメルッチの「惑星社会論」とも通じる世界観である。アルベルト・メルッチ、新原道信／長谷川啓介／鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ—惑星社会における人間と意味』ハーベスト社、2008年。